

カワウの生態特性

(主に特定鳥獣保護管理計画技術マニュアル(カワウ編)より抜粋)

～大きさ・運動能力～

- ・体長約 80～85cm、翼長 31～34 cm、体重 1.5～2.5kg 程度
- ・オスはややメスより大きい
が野外での判別は困難
- ・羽色は全身褐色がかかった黒色で、繁殖期になると頭部と腰部に白い繁殖羽が現れ、目の下の露出部が赤くなる
- ・水鳥であり水掻きを使って潜水することができるが、潜りやすくするためか脂の分泌量が少ない。このため、長時間潜っていると羽が濡れて飛べなくなってしまうため、独特の姿で羽を乾かす。
- ・潜水能力：1m～9.5m程度
- ・潜水時間：最大 70 秒程度

～食性・行動～

- ・ほぼ魚食性で、魚種の選択性はなく利用した場所でその時一番捕食しやすい魚種を食べるとみられる
- ・集団で行動し、昼間も大きな群れで移動及び採餌を行うことがあるが、特に夜間は群れで休息・睡眠し繁殖も多数の個体が集まって行う
- ・ねぐら※1やコロニー※2は、水辺に接する場所につくられ、樹木のほか岸壁や人工構造物等さまざまな場所を利用する
- ・採餌場所：関東地方では春から夏は沿岸部、秋から冬は内陸部の河川
- ・1日の採食量：約 400g～620g(飼育下)、体重 1kg あたり 262g(野外推定)
- ・1日の行動直径：10km～50 km程度

※1 ねぐら：多数の個体が集まって夜間の休息・睡眠をとる場所

※2 コロニー：集団営巣地のことで多数の個体が集まって密集して巣を造って繁殖する場所、ほとんどが繁殖期以外はねぐらとして利用される

～繁殖～

- ・繁殖時期は、コロニーの場所により期間に大きな差がみられ、カワウは日長や気温に関係なく、どの季節にも生理的には繁殖が可能な種であると考えられている
- ・巣は木の細い枝や枯れ草、青葉等を直径 40～60 cmの皿形に組み合わせて造られ、巢材運びは主にオスが行い、巢作りはメスが行うという役割分担がされているが、抱卵及びヒナへの給餌は雄雌ともに行う
- ・1腹卵数：1～7個で3個がもっとも多い
- ・抱卵期間：24日～32日
- ・巣立ち：ふ化後、31日～59日
- ・繁殖齢：1歳～8歳で、平均オス 2.1歳、メス 2.6歳と試算(不忍池での調査)

～県内での生息数及び分布～

- ・生息数及びねぐら数は、平成 14 年以降増加傾向にあり(表 1)、冬季 1900 羽夏季約 900 羽の生息が確認されている
- ・飛来確認事例(生息状況調査から抽出)は平成 8 年度から平成 17 年度までの 10 年間で県南部から県中央部・北部へと拡大傾向にある (図 1)

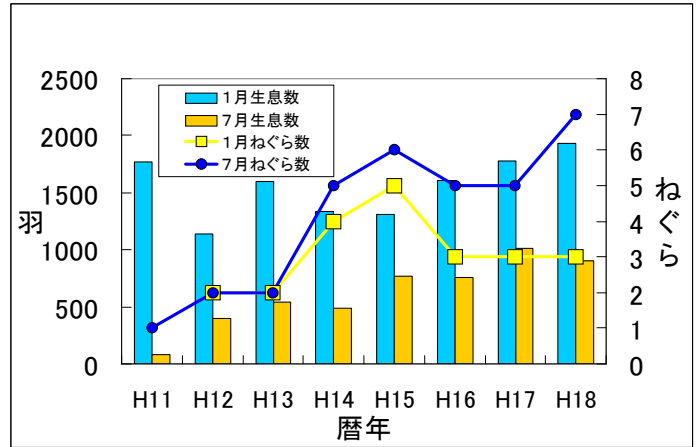


表 1 県内の生息数及びねぐら数



図 1 県内の飛来状況

～広域での分布～



図2 関東&中部近畿 H18.7
ねぐら・コロニー分布図

～生態系における位置と役割～

カワウは河川・湖沼等の水域において潜水して魚類を採餌し、ねぐら等に戻って陸上に糞や吐き戻しを落とします。水域生態系におけるカワウは、食物連鎖における高次消費者であり、水中の栄養塩類を結果的に外に運び出し、富栄養化を抑制する働きをしています。

魚や糞といった形でカワウが陸域に運ぶ物質は、微生物などによって植物が利用できる無機物に分解される等、陸域の生物相や生態系にさまざまな影響を与えています。(短期的にみれば過剰な養分供給は、樹木枯死の原因にもなるが、長期的には、森林の更新サイクルを促進しているとも言えます。)

このように水域生態系と陸域生態系の物質循環を連結することで、双方の生態系で重要な働きを担っています。

また、常温で気体とならない物質は火山活動等地質学的な変化がないと水中から陸上へ戻る経路がなく、水域と陸域をつなぐ生物の役割は近年注目されています。

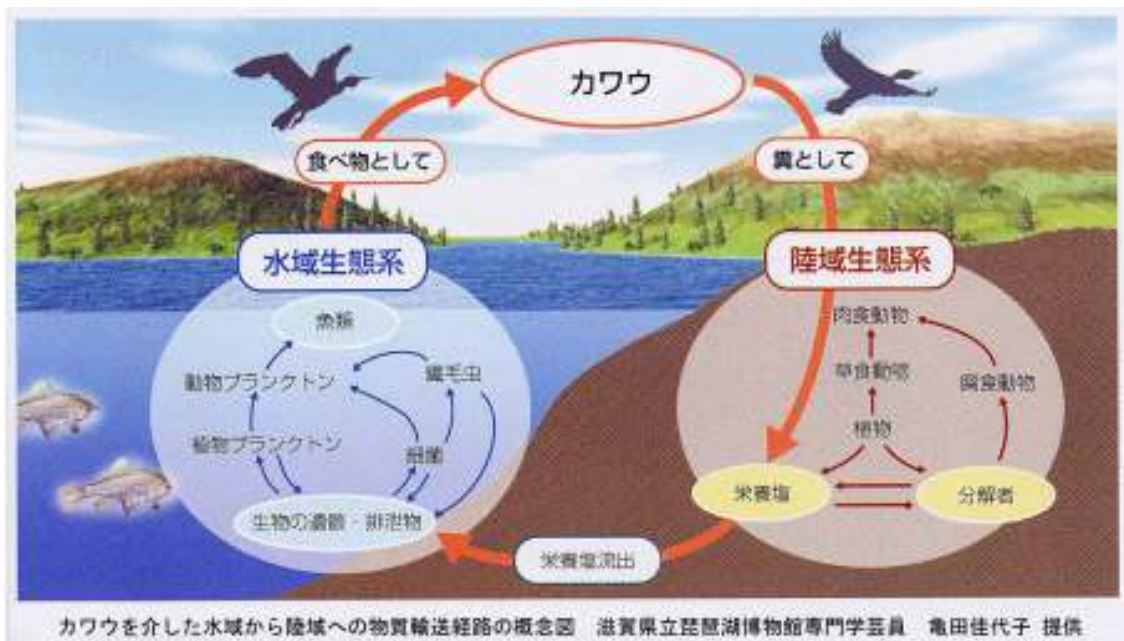


図3 カワウの物質循環における役割